様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７００１６

研究課題名（和文）心性論と社会倫理思想の観点による唐宋禅宗思想史の研究

研究課題名（英文）Studies on the history of Chan thought in Tang and Song dynasty in terms of social ethics and mind-nature theory

研究代表者
土屋　太祐（TSUCHIYA, Taisuke）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：２０５０３８６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：唐末福建の雪峰教団は雪峰系と玄沙系という二つの系統に分裂していった。その背景には思想的な原因があり、玄沙―法眼系の禅僧は個人を超越し、世界に充満する仏性の体得を目標とした。これは唐代禅の思想的営為の一つの結論といえる。また北宋代の禅僧である契嵩は、その著書『輔教編』で、当時の排仏論から仏教を護るため、仏教が社会秩序の維持に貢献しうることを主張した。その論理体系においては、社会秩序を維持する手段として「因果応報」の観念が重視された。また仏教の他教に対する優位性として実践性を重視した。これは無事禅批判の先駆けとなるものであった。

研究成果の概要（英文）：The Xuefeng（雪峰） school in Tang Dynasty Fujian split into two, the lineage of Xuefeng and the lineage of Xuansha（玄沙）. This was caused by some differences in thought. Monks of Xuansha-Fayan（法眼）’s lineage aimed to realize the Buddha Nature which transcends the individual level and prevails in the world. It can be said that this is one conclusion of Chan Buddism thought in Tang Dynasty. In order to protect Buddhism from the anti-Buddhist rhetoric, in Fujiaobian（《輔教編》）, Qisong（契嵩）, who was a Chan monk in Northern Song Dynasty, claimed that Buddhism could contribute to the maintenance of social order. In his theory, the concept of “retribution”（因果報應）was emphasized as a means of maintaining social order. He also put an emphasis on practicality as Buddhist superiority over other doctrines. This can be considered a forerunner of criticism of Chan which stressed the idea of doing nothing（無事禅）.

研究分野：中国禅宗史

キーワード：仏教　禅宗　唐宋　雪峰義存　玄沙師備　契嵩　心性論　無事禅

１．研究開始当初の背景

（１）語録や灯史といった禅の思想文献を、思想史的文脈に即して読解する研究手法が成熟し、研究が遅れていた馬祖道一以降の唐宋禅思想史が解明されつつある。代表的な成果としては、小川隆『語録のことば』（禅文化研究所、2007 年）、同『語録の思想史』（岩波書店、2011 年）、土屋太祐『北宋禅宗思想及其淵源』（四川出版集団巴蜀書社、2008 年）等があり、その後も継続的に研究が進められている。

（２）とくに 2000 年代に入ってからの顕著な研究成果としては、馬祖道一の思想的特徴、およびそれに対する批判の論理構造が解明されたこと、更にこの対立を軸とした思想史が構築されてきたことが挙げられる。馬祖系統に特徴的な思想は、一般に「作用即性」説と呼ばれる。これは自己の本性である「（仏）性」と、その「作用」である動作行為、認識作用、認識対象を同一視する思想であった。これに対して、馬祖系からわかれた石頭系は批判を提出した。彼らは、「作用」はあくまで派生的で虚妄なる存在であり、それとは別の次元に不変の「性」があるという点を強調した。このような対立を出発点として、様々な思想的観点が提出され、禅の思想は多様化していった。

（３）また、唐代の禅とは別に宋代禅の思想的展開が解明されてきたことは、もう一つの大きな成果であった。宋代以降の中国禅宗において、最終的に主流派となった大慧宗杲の「看話禅」は、「悟り」の実在を強調することに特徴があった。それはそれ以前の唐代禅が修行と悟りの価値を否定し、作為を加えないありのままの本性こそが仏性であるという「無証無修」の立場に立っていたこと、さらにそれを引き継いで北宋初の禅林に流行した「無事禅」と呼ばれる思想傾向と較べ、きわめて特徴的であった。2000 年代以降の研究によって、このような宋代的な特色が現れてくる過程の解明が進んだ。

（４）しかし、これらの研究には、いまだいくつかの問題が残されている。例えば、唐から宋への過渡期における思想動向はまだ十分には解明されていない。また禅宗思想史がその外部の環境といかなる関係を持ち、中国全体の思想史中にいかなる位置を占めるのかという問題も、解明されていない点が多い。そこで、禅宗思想史自体における空白を埋めつつ、中国思想史全体の中に禅思想史を位置づけていく必要がある。

２．研究の目的

上のような課題を解決するため、本研究は、心性論と社会倫理思想という二つの観点からいくつかの問題を分析し、より完成された禅宗思想史の構築を目指す。余英時『朱熹的歴史世界』（生活・読書・新知三聯書店、2004 年、45 頁、297 頁）は、五代の戦乱を経験した宋代知識界の共通目標が社会秩序の再建にあったことを指摘する。このような社会的雰囲気は、出世間を旨とする仏教教団にあっても無関係ではなかった。仏教が社会的要請にいかに応答したかは、仏教と世俗社会の関係を考えるうえで重要な問題である。いっぽう心性論は、この社会倫理思想と密接な関係を持つ。禅は「見性成仏」を最終的な目標とし、心性論は常に思想的議論の中心テーマであった。この心性論は禅思想の形而上学的基礎であり、これにもとづいて社会倫理等の形而下的な命題が決定されるからである。

３．研究の方法

本研究は、文献学を基礎とする、禅の思想史的研究である。思想文献の読解にもとづきながら思想史の構築を目指す。「研究の目的」に述べたような問題意識に照らし、具体的な研究対象としては唐末五代の雪峰系教団、宋初の護教的禅僧である契嵩、宋代禅宗の帰結の一つである「看話禅」の大成者大慧宗杲という三者を設定して研究を行う。

このうち、福建の雪峰義存の禅教団からは雲門、法眼の二宗が現われ、この二宗が禅の伝統を宋代へと伝える。雪峰系の教団は唐宋の禅をつなぐ要の位置にあると言える。彼らは、神会－馬祖－ポスト馬祖時代と展開してきた唐代禅の心性論に関する議論を承けつつ、さらなる発展を果たした。この集団の思想を対象として、唐代禅の思想的帰結と、宋代禅思想の基礎となった心性論的視点を考察する。

続いて契嵩は、宋代の禅宗において、心性論と社会倫理思想を結びつけようとする試みの最も顕著な例と言える。契嵩は、北宋代に入ってますます顕著となった、儒者による排仏論に応答しながら、仏教および禅宗を擁護しようとした。このような契嵩を対象として、宋代における禅とそれを取り巻く社会状況との関係を考察する。

さらに、契嵩の後、士大夫からの支持を得たという点で成功を収めたのは大慧宗杲である。最後は大慧の思想から、宋代の社会において変容を遂げた禅の姿を考察する。

４．研究成果

（１）唐末から五代にかけての中国福建の禅宗教団である雪峰教団の心性論について、まずは雪峰系と玄沙系の分裂と抗争を考察した。両集団の手により成立した『祖堂集』と『景徳伝灯録』という二つの文献の性質の違い、また『宋高僧伝』その他の歴史的資料に見られる記述により、両集団が分化していたことは間違いない。特に呉越出身の僧である賛寧によって著された『宋高僧伝』は、同じく呉越で大きな影響力を持った天台徳韶―永明延寿によって代表される法眼宗に対する親近感を隠さず、遅くとも宋初には両集団

が別のものと認識されていたことは確実である。このような分裂の背後には思想的な要因があったと考えられる。

（２）上のような分裂を理解するためには、その前提となる雪峰教団の性質を考えなければならない。雪峰教団において、馬祖道一の系統の思想、いわゆる「作用即性」説に対する批判はすでによく知られていた。また、教団の中心人物である雪峰義存の開悟の因縁を語る「鰲山成道」の話においては、馬祖系に対する批判者である石頭系をも批判的に捉える視点が現れている。ここから考えれば、雪峰自身が、馬祖系、石頭系の両者を乗り越えんとする自意識を持っていたと思われる。このような雪峰の問題意識は、資料的制約も大きく、完全に解明することはむずかしいが、その後の玄沙の問題意識等を参考にすれば、それは自己の仏性が世界全体に拡張されること、意識と現象界の一致を実現することであったと考えられる。

（３）雪峰系と玄沙系は分裂していった。その背後には思想的差異があった。玄沙は法系上、雪峰の法嗣であるが、時として雪峰に鋭い批判を投げかける。両系の分裂はすでに雪峰と玄沙の間に胚胎していたといってよい。ただし、（２）に述べた問題意識について、雪峰と玄沙の間に違いはなかったと思われる。玄沙の思想的標識として知られるのは三句綱宗であるが、その三段階の理論は、第一句：自己の見聞覚知（精神作用）が仏性の表れである、第二句：見聞覚知という、対象に依存した精神作用の深層に、より根源的な仏性として「元常」が存在する、第三句：この根源的な「元常」が見聞覚知を介さず、直接的に宇宙に充満する、というものである。第三句は玄沙の最終的な立場を表すものであるが、雪峰の問題意識と大きな違いはない。玄沙が批判するのは、雪峰の問題意識そのものではなく、それを実現する経路であったと考えられる。玄沙が批判したのは、あくまで意識の作用である「見聞覚知」を媒介として、意識と世界の一致を図ろうとする態度であった。このような態度は、馬祖の「作用即性」説に後退する危険性を持っていたし、また仏教の基本原理である「無我」に反して、自己の意識を実体視する恐れを持っていた。これに対して玄沙は『楞厳経』の論理を援用しながら、「見聞覚知」とは別次元の、個人存在のなかに局限されない本性が、直接に宇宙全体に充満するという論理を三句綱宗の中で表現した。

（４）このような観点を受け継いだのが法眼宗であった。法眼宗の特徴としてしばしばあげられるのが華厳思想との融合であるが、そのような特徴はすでに玄沙の理論の中に見られる。玄沙はその第三句の立場を表明する際にしばしば華厳思想に由来する表現を用いる。上に述べたように、玄沙は『楞厳経』にもとづいて個人を超えた存在の本質である仏性・真如の存在を主張する。その一方で、華厳の「事事無礙」的思想を援用して、仏性・真如の中で、個別的な存在物が円成するという現実肯定的な観点を説明していると考えられる。法眼宗においてはこのような華厳思想の存在感が増している。玄沙の後継者たちは、このような思想を受け継ぎ、個人に還元される見聞覚知の実在性を否定しながら、全体的仏性の中で個別的な存在を肯定する思想を完成させていった。このような観点は、法眼宗だけでなく、やはり雪峰門下から派生した雲門宗にも顕著に見られる。そしてこれらの傾向は、宋代にかけて「無事禅」という現実肯定的な思想を生んでいったものと考えられる。

（５）北宋代に至り、雲門宗の僧契嵩はその著書『輔教編』において、仏教が国家の統治に貢献しうることを証明し、仏教を排仏論から護ろうとした。中国仏教に共通する特徴として、『輔教編』にも明確な教判の構造（上から菩薩乗、縁覚乗、声聞乗、天乗、人乗）が見られる。そのうち社会秩序の維持に貢献するのは主に下位に当たる人・天乗で、そこでは「因果応報」の観念が重要な働きをする。一方、最上位の菩薩乗は「一心源」を所依とし、仏教の至高の悟りの境界を代表する。一般に契嵩は士大夫に先駆けて「性命」の学を提唱したとされるが、契嵩自身は儒家および諸子にも「性命」が説かれるとし、「性命」の学が仏教の専売特許であるとは考えていない。また後に主流となる道学の観点と異なり、契嵩は「性無善無悪」を主張した。そのため、仏教的な真理の本体といえる「性」と社会秩序の関係は十分に整理されておらず、人天乗と菩薩乗の理論的な関係もあいまいである。一方で他教に対する仏教の優位性は現実に悟りに至ることが可能な実践性である「因果修証」にあるとする。このころまで、禅の思想の主流は、玄沙や雲門によって主張された現実肯定的な思想であり、修行否定的な「無修無証」の立場が支配的であった。契嵩の批判はこのような現実肯定傾向に対する最も早い批判の一つと言え、このころから現実肯定的な思想、つまり「無事禅」に対する批判が徐々に増え、北宋後半から南宋にかけて禅宗の主流となっていく。契嵩の登場は、唐末以来の思想傾向の終焉を示すものであると言える。

（６）本研究は当初の予想とやや異なり、雪峰教団の研究においてより多くの問題を発見し、新たな知見を得ることとなった。一方、大慧宗杲に関しては、特筆すべき研究成果が得られなかった。これは大慧の著書が社会倫理的な問題に対してさほど積極的に言及していないためである。しかし、契嵩や宋初の排仏論に関する研究から、大慧の思想が生ま

れてきた社会的背景はより明確になったものと考える。宋初からの思想史的文脈を考慮するならば、大慧が「看話禅」を提唱し、「悟り」の価値を重視したのも、唐代以来の現実肯定的思想を転換し、社会的要請にこたえようとしたものと見られてよいだろう。大慧の思想にかんしては、当時の士大夫の捉え方など、仏教外部の視点を取り入れながらさらに研究を深める必要がある。

（７）研究期間中には東京大学東洋文化研究所「中国禅語録の研究」研究班において、宋代の禅籍である『碧巌録』の読書会を行い、三篇の訳注稿を発表することができた。『碧巌録』は、宋初雲門宗の僧雪竇重顕の頌古を、大慧の師である圜悟克勤が提唱したものである。参加者との討論を経て、緻密な読解が実現したものと考える。詩的・文学的な表現を多く含む非常に難解なテキストであるが、会読の結果、無事禅や公案解釈と関連する多くの思想的な内容を読み取ることができた。また『碧巌録』が北宋末までの禅の思想史を重層的に反映したテキストであることが再確認され、禅の思想史的研究に資する訳注研究を発表できたと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６件）
①土屋太祐「玄沙の臨済批判とその背景」、『『臨済録』研究の現在―臨済禅師一一五〇年遠忌記念国際学会論文集』、禅文化研究所、査読無し、2017、印刷中。

②土屋太祐「『一夜碧巌』第三則訳注」、『東洋文化研究所紀要』第 171 冊、2017、27‐56 頁。

③土屋太祐「『一夜碧巌』第二則訳注」、『東洋文化研究所紀要』第 169 冊、2016、23‐66 頁。

④土屋太祐「契嵩《輔教編》中的因果報應與修證」、『中国俗文化研究』第 10 輯、四川大学俗文化研究所、2015、57‐67 頁。

⑤土屋太祐「大慧宗杲における華厳と禅―雪峰集団における華厳思想の受容とその宋代禅への影響」、『仏教学報』第 73 輯、東国大学校仏教文化研究院、2015、33‐61 頁。

⑥土屋太祐「『一夜碧巌』第一則訳注」、『東洋文化研究所紀要』第 167 冊、2015、105‐163 頁。

〔学会発表〕（計　３件）
①土屋太祐「玄沙の臨済批判とその背景」、臨済禅師 1150 年遠忌記念『臨済録』国際学会、2016 年 5 月 13－14 日、花園大学（京都府京都市）。

②土屋太祐「大慧宗杲における華厳と禅―雪峰集団における華厳思想の受容とその宋代禅への影響」、東アジアにおける華厳と禅、その緊張と緩和、2015 年 11 月 28 日、ソウル（韓国）。

③土屋太祐「契嵩《輔教編》中的因果報應與修證」、東亜文献与中国俗文化国際学術研討会、2014 年 7 月 12－13 日、成都（中国）。

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
土屋　太祐（TSUCHIYA, Taisuke）
新潟大学・人文社会・教育科学系研究科・准教授
研究者番号：20503866

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者

( )